

2021年小教区評議会役員研修会

サイクルテーマ①「教会と福音宣教の理解」 コロナ禍における信仰と福音宣教

日時：2021年5月29日(土) ZOOM ミーティング

■役員研修会の目的

1. 役員は、その任期中に、教会運営のために奉仕するのですが、第一の役割は、ブロック司牧チームとともに、教会の活動を方向づける、いわば「頭」となることです。そのためには、「頭」の一員としての役員に、必要な「心構え」と「方法」を学んでいただくことが、役員研修会の目的です。
2. 京都教区は、役員研修会を、3年を1サイクルのテーマで企画しています。テーマ①「教会と福音宣教の理解」、②「共同体づくり」、③「社会への福音宣教」です。まず、①「教会と福音宣教の理解」では、カトリック教会が「教会であること」の意味と、教会の使命である「福音宣教」の理解を深めます。次に②共同体づくりでは、小教区共同体の信徒全員が参加して、福音宣教で行うためにふさわしい共同体づくりについて考えます。そして、③社会への福音宣教では、時代の「時のしるし」を見て、社会の中で具体的にどのような福音宣教を行うかを考えます。
4. この①②③の流れの研修で大切なことは、時代と社会の動きをよく見て、その時必要とされている教会のあり方を模索していく、ということです。
5. このように毎年行われる役員研修会では、役員信徒が数年で交代していくなかでも、上記の3つのテーマで研修を繰り返し受けていくことで、信徒として成長していくことができます。
6. 実際の教会活動では、この①②③を同時に行っています。したがって、どの年の研修会でも3つのテーマの関連性と全体像を念頭において、参加してください。

■小教区活動の3つの領域

教会活動の領域には、対象とする人に3つのグループがあります。司牧宣教活動の計画を立てるとき、この3つのグループに対して偏りがないように配慮しなければなりません。

- 1) 普段、通常の教会活動に参加する（できる）信徒
- 2) 教会から離れた信徒や、しばらく教会活動に参加していない信徒
- 3) 社会の中で、キリスト教信仰を求める人

■2021年の「時のしるし」とキーワード

今年は、①「教会と福音宣教の理解」です。コロナ禍の下で、わたしたちが取りくむ福音宣教の理解を深めます。そのために、以下のキーワードをあげます。

① 「出向いて行く教会」

- ・教皇フランシスコ、『福音の喜び』（N20）で言われた教会の基本的姿勢。
「自分にとって快適な場所から出て行って、福音の光を必要としている隅に追いやられたすべての人に、福音の光を届ける勇気を持つように招かれている」
- ・教皇フランシスコは、教会の外に出て、人と出会い、人それぞれの人生に向き合い、寄り添うことをイメージされている。
- ・教会は、自分たちの共同体の交わりと養成にとどまらず、日常生活で出会う人との交わり（生活のあかし）と、すべての人が大切にされる社会を目指す活動に参加しなければならない。

- ・特に、諸宗教対話の観点から、教皇フランシスコは「少数派の日本の教会の福音宣教は、普段の生活の中での目立たぬあかしと他の宗教的伝統との対話である」ことを強調された。(日本司教団へのスピーチ 2019 11/23)

② 『すべてのいのちを守るため』2019年の教皇フランシスコの訪日テーマ

- ・日本司教団へのスピーチ(2019 11/23)「神から無償で与えられたすべてのいのちを守ることと、福音宣教は互いに必要とし合うものである。」

③ 『コロナ時代を生きる信仰』(2021年司教年頭書簡)

1) キリスト者として、各自の信仰を深める

コロナ禍による現実を信仰で受けとめ、コロナ時代を生きる各自の信仰について、その根本から問い直す。自分を見つめ、自分の生きがいや、人生の意味について問う。

神と語りあう時間を日常生活の中に持ち、「現実」から生まれる祈りをささげる。

2) 宣教する共同体の一員として

コロナ禍で、物理的に集まれなくなった今、教会共同体とは何かを考える。

「信者が教会に集うという目に見える教会活動とともに、神と人との親しい交わりを生きたいという望みが、教会共同体を築き上げる。」(年頭書簡 5)

3) 日本社会の一員として；「共生」・「連帯」・「絆」・「希望」

- ・コロナ時代の霊性は、ともに住むこと。教皇フランシスコ「2020年復活祭メッセージ」(4/12)「今は無関心でいる時ではありません。今は、エゴイズムの時ではありません。今は分裂している時ではありません。今は忘れる時ではありません。」

- ・「パンデミック以前を取り戻すのではなく、これまで以上に、人類が連帯を示し、もっとも傷つきやすい人を中心にした社会を築いていくために私たちが持つべき抗体を教皇は「正義と愛と連帯の必須の抗体」と名付けられた。」(年頭書簡 10)

- ・コロナ禍以前から、大勢の人を苦しめている緊急事態がある(経済格差、いじめ、差別、在住外国人、技能実習生、こどもの貧困・・・)。

コロナ禍の影響下の「貧しい人」にどのように寄り添うか。

解雇、雇止め等による失業。外国人技能実習生や派遣社員、パート、アルバイトなど。生活苦、絶望から自死を選ぶ人の増加。

- ・「誰も一人では再出発することはできない」(教皇フランシスコ) 人との出会い、絆を作り、深め、希望を分かち合う。

■2020年5月「ミサ等中止の措置」に関する緊急アンケートより

- ・習慣的に日曜日にミサに行けば終わりの教会から、日常生活にかかわる教会の在り方を考えるよい機会としなければと思う。
- ・離れた場所でも同じ時間に祈ることにつながりを感じることができた。
- ・これを機に普段から教会に来ることが難しい方がいろいろな機会を通じて教会とつながれるようなことができればと思う。
- ・何かあった時の連絡システム、助け合いのシステムは大切である。
- ・若い世代を巻き込んだこれからの新しい教会づくりのためにも、事務処理など可能な部分のデジタル化を進める。同時に、インターネット環境のない人への配慮も怠らず、様々な方法で情報を提供できるようにしておく。

以上。